

## 日本語の終助詞と格助詞脱落について

### Sentence Final Particles and Case Marker Drop in Japanese

福田 稔・古川 武史

Masunaga (1988)は、「よ」などの終助詞が文末にあると、主語に付く主格助詞「が」や目的語に付く対格助詞「を」が脱落可能になることを指摘し、終助詞には脱強調化 (de-emphasis) の機能があり、これが格助詞の脱落と関係していると論じた。この考察を、遠藤・前田 (2020)は刈り取り (truncation) という操作と移動を用いて捉えようとしているが、依然として課題が残る。そこで本稿では、遠藤・前田 (2020)と Miyagawa (2010, 2017, 2022)の分析を部分的に援用して、終助詞「よ」・フォーカス・格助詞脱落の三つ巴の関係を捉える新たな提案を行う。具体的には、フォーカスを受ける要素は音声的に具現化しなければならず、その環境にある格助詞「が・を」の脱落はできないという外在化条件、終助詞「よ」の2種類の派生導入、フォーカス投射 (Focus Projection) の拡張を仮定して説明する。また、これらの分析を基に、これまで注目されていなかった多重主語構文での主格助詞「が」の脱落現象を考察し、本稿での提案に基づいて「が」脱落の可能性を説明する。

**キーワード**：終助詞、格助詞脱落、フォーカス、フォーカス投射、多重主語構文

#### 目次

- I はじめに
- II 終助詞と主格助詞「が」の脱落
- III 文末要素の統語分析
- IV 終助詞の移動分析
- V 多重主語の格助詞の脱落
- VI フォーカス解釈と節構造
- VII おわりに

## I はじめに<sup>1</sup>

Masunaga (1988)は、主格助詞「が」と対格助詞「を」の脱落現象と、終助詞の存在の関連性を指摘した。まず、対格助詞「を」の脱落現象を検討してみよう。例えば、(1)は、(映画の)『乱』の直後に対格助詞「を」を明示する限り、終助詞の存否に関係なく文法的である。しかし、対格助詞「を」が脱落すると、終助詞「ぞ」または「よ」が文末に現れない限り、不自然になる。見方を変えると、終助詞が対格助詞「を」の脱落を許しているのである<sup>2</sup>。

- (1) a. (昨日 ポストンで)『乱』{を/???φ}見た  
b. (昨日 ポストンで)『乱』{を/φ}見た{ぞ/よ}

Masunaga (1988)は、同じことが主格助詞「が」でも確認できると論じている。例えば、(2)のように、終助詞「ぞ」または「よ」が文末に付かないと、「ブロンドの男の子」に付く主格助詞「が」の脱落は許されない。

- (2) a. ブロンドの男の子{が/\*φ}太郎を殴った  
b. ブロンドの男の子{が/φ}太郎を殴った{ぞ/よ}

他の事例も勘案して、Masunaga (1988)は、脱強調化 (de-emphasis) が格助詞の脱落と関係していることを指摘した。脱強調化には複数の手段があるが、文末に終助詞を付け加えることは脱強調化の一つである。この考察を遠藤・前田 (2020: 86)は次のようにまとめている<sup>3</sup>。

- (3) 主題要素 (theme) からフォーカスが取り除かれた場合、その格助詞は脱落することが可能となる。

Masunaga (1988)の分析に対して、Fukuda (1993)は格助詞を伴う名詞句は Kase Phrase (KP)を成すと仮

<sup>1</sup> 本稿は、日本英文学会九州支部第75回大会(2022年10月22日(土)、西南学院大学)で開催されたシンポジウム「統語論と言語学関連分野とのインターフェイス」での共同口頭発表「統語構造と意味解釈のインターフェイス—多重主語構文を巡って—」で扱った共通語の言語資料を中心に、加筆修正を施したものである。発表では熊本方言についても扱ったが、これについては別稿で論じる予定である。準備の段階や発表当日において、資料提供、質問、コメント等を頂いた(50音順で)佐々木美芳、中谷健太郎、永次健人、中村浩一郎、西岡宣明、西原俊明、前田雅子、森竹希望の各氏には記して感謝申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費JP19K00666の助成を受けている。

<sup>2</sup> 例文中のφは格助詞の脱落を表す。

<sup>3</sup> 言い換えると、格助詞が付加する名詞句にフォーカスが保持されたままだと、脱落は不可となる。

定し、さらに、格助詞の脱落位置には空範疇（empty category）があると仮定して、この要素は主要部による適正統率（proper government）を満たす必要があると論じた。具体的には、(4)の Rizzi (1990)の適正統率を前提として、(5)に示したように、対格助詞「を」に対応する空範疇の $[_k e]$ はVPの主要部Vによって適正統率され、主格助詞「が」に対応する空範疇の $[_k e]$ はCPの主要部Cを占める終助詞によって適正統率される。

(4) A nonpronominal empty category must be properly head-governed.

(5) [CP [IP [KP NP  $[_k e]$ ] [I [VP ... [KP NP  $[_k e]$ ] ... V] [I ta]]] [c yo/zo/no]]

(4)と(5)の分析の帰結として、格助詞の脱落現象は、適正統率が満たされているか否かがチェックされる論理形式（Logical Form）部門が関係する現象であると Fukuda (1993)は論じた。しかしながら、統率という概念を受け入れないミニマリスト・プログラムのもとでは、適正統率といった概念に依らない新たな説明が求められることとなった。

そこで本稿では、第II節で最近の遠藤・前田 (2020)の分析を検討し、残された課題を指摘する。第III節では、Miyagawa (2010, 2017, 2022)と斉藤 (2022)の文末要素の分析を概観し、第IV節では遠藤・前田 (2020)と Miyagawa (2010, 2017, 2022)の分析を部分的に援用して、終助詞「よ」が付加する位置と、主格助詞「が」の脱落との関係を捉える新たな提案を行う。第IV節の提案を基に、第V節と第VI節では、これまで注目されていなかった多重主語構文での格助詞の脱落現象を説明する。最後に、第VII節で本稿での主張をまとめて、課題について触れる。

なお、フォーカスに関する仕組みの精密化は必要であるが、全体像として、統語部門ではフォーカスを構成素に与える下準備を行い、論理形式部門ではそれを読み取るフォーカス解釈を行い、形態・音韻部門ではそれを発音として外在化（具現化）するという役割分担を本稿では想定する。

## II 終助詞と主格助詞「が」の脱落

例えば、(2b)の主格助詞「が」の脱落現象に関しては、遠藤・前田 (2020: 89-92)は、Rizzi (1993)の刈り取り（truncation）という操作による(6)の構造派生を提案している<sup>4</sup>。

- (6) a. [[NP ...] が]  
 b. [NP ...]  
 c. [IP [NP ...] ... SFP ...]

<sup>4</sup> SFP は終助詞（sentence final particle）を表す。

- d. [Speech-ActP ... [IP [NP ...] ... SFP ...]]  
 e. [Speech-ActP ... SFP [IP [NP ...] ...]]  
 f. [Speech-ActP [IP [NP ...] ...] [Speech-Act ... SFP t]]

まず、(6a)のように主語 NP が構築され、次の(6b)で刈り取りによって主格助詞「が」の投射が省かれる。そして、(6c)に示すように、この NP が IP と併合 (Merge) する<sup>5</sup>。ただし、刈り取りを受けた NP は、IP の最上位の位置にしか併合されない<sup>6</sup>。

さて、次の(6d)で IP が Speech-Act と併合し、その後、終助詞 SFP に対してモダリティの意味が付与される。そして、この終助詞が、(6e)のように Speech-Act P(phrase)の主要部へ移動する。この移動に続く最後の(6f)で、IP 全体が Speech-ActP の指定部へ移動する。この一連の操作によって主格助詞「が」が脱落した構文 (例えば、(2b)) が派生されるのである。また、終助詞が欠落する構文では、IP が Speech-ActP の指定部へ移動しないため、IP は文構造の最上位の位置にはない。そのため、終助詞が欠落すると主格助詞「が」の脱落は許されないことになる。

遠藤・前田 (2020)の研究は、終助詞と主格助詞「が」の脱落を関連させた点で極めて興味深いのが、いくつか課題が残っていると思われる。まず、終助詞と格助詞脱落とフォーカスという三つ巴の関係が明確でないという点である。(6)の派生は前者の2つ、つまり、終助詞と主格助詞「が」の脱落との関係を捉えたところで留まっている。

次に、遠藤・前田 (2020)の提案で(2)以外の事例がどのように説明されるのかという点も明らかでない。例えば、注6で触れたように、(1b)の対格助詞「を」の脱落に関する説明課題が残っている。また、(7)から(9)の多重主語構文での「が」の脱落が挙げられる。(9)のように、先頭の「鹿児島と宮崎」に付く主格助詞「が」は、終助詞「よ」が付かない限り脱落できない。この先頭の「が」主語は大主語 (major subject) と呼ばれ、文構造において2番目の「焼酎が」よりも高い位置を占めると分析されている (三原 (1994))。見方を変えると、2番目の「焼酎が」は最上位の位置を占めないため、遠藤・前田 (2020)の分析は「焼酎が」の「が」は脱落できないと予測する。しかし、終助詞「よ」の存否にかかわらず、(8)のように、実際には脱落は概ね可能である。

- (7) a. 鹿児島と宮崎が焼酎がうまい  
 b. 鹿児島と宮崎が焼酎がうまいよ  
 (8) a. (?)鹿児島と宮崎が焼酎がうまい

<sup>5</sup> (6c)の段階で、既に終助詞が文構造に導入されている点が、我々の提案にとっても重要となる。

<sup>6</sup> 刈り取りを受けた NP が IP の最上位の主語位置を占めるが、この IP 自体も文構造の最上位を占める必要があると遠藤・前田 (2020: 90-92)は想定しているようである。この条件によって、埋め込み文内で主格助詞「が」の脱落が不可能であるという事実が捉えられる。ただし、(1b)で考察した対格助詞「を」の脱落はどのように説明されるのかという疑問が湧く。

- b. 鹿児島と宮崎が焼酎 $\phi$ うまいよ  
(9) a. \*鹿児島と宮崎 $\phi$ 焼酎がうまい  
b. 鹿児島と宮崎 $\phi$ 焼酎がうまいよ

最後に、遠藤・前田 (2020: 87, 92-93)が指摘するように、(10)のような感嘆符や疑問符と主格助詞「が」の脱落の可能性が課題として残っている。つまり、言語表現として顕在化していない要素と格助詞の脱落との関連である。

- (10) a. ブロンドの男の子{が/ $\phi$ }太郎を殴った？  
b. ブロンドの男の子{が/ $\phi$ }太郎を殴った！

### III 文末要素の統語分析

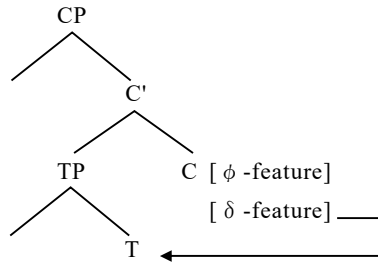
本節では、Miyagawa (2010, 2017, 2022)と斉藤 (2022)の文末要素の分析を概観する。まず、Miyagawa (2010, 2017, 2022)の一連の研究を見てみよう。まず、Miyagawa (2010: 12)は、(11)に示したように、全ての言語が同じ種類の文法素性 (grammatical feature) を持っており、どの言語もこの素性を顕在化させているという強い均一性 (Strong Uniformity) を提案している。

(11) Strong Uniformity

All languages share the same set of grammatical features, and every language overtly manifests these features.

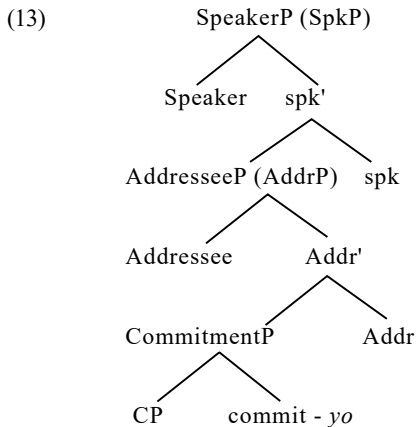
(11)で言及された文法素性として、(人称や数などの) $\phi$ 素性と(フォーカス(焦点)やトピック(話題)などの) $\delta$ 素性がある。例えば、英語のような一致 (agreement) に基づく言語においては、 $\delta$ 素性がCPの主要部Cに残り、 $\phi$ 素性がTPの主要部Tに継承され、これが移動を引き起こす。一方、(12)に示したように、日本語のような言語においては、 $\phi$ 素性がCPの主要部Cに残り、 $\delta$ 素性がTPの主要部Tに継承され、これが移動を引き起こす (Miyagawa (2010: 19, 2017: 4))。

(12) Feature inheritance in discourse-configurational languages



ただし、Miyagawa (2017: 165-166)によると、フェイズ主要部である  $v^*$  も [focus] 素性を持つ場合がある<sup>7</sup>。

さて、最近の Miyagawa (2022: 105) では、CP より上位の構造に着目した(13)を提案している。特に、終助詞「よ」に関しては、CP を支配する Commitment Phrase の主要部に「よ」が位置していると論じている。なお、終助詞「よ」の働きを、Miyagawa (2022: 106) は(14)のようにまとめている。

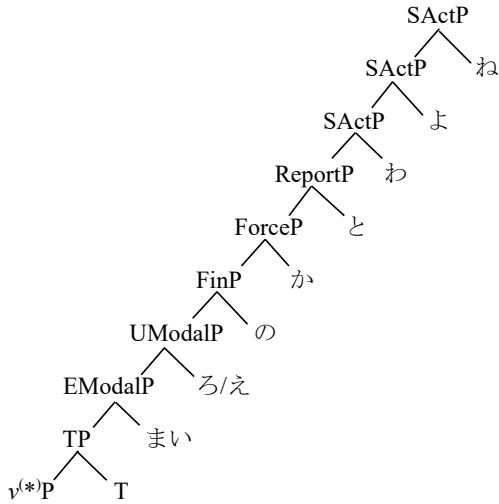


(14) "yo, which, as a marker of certainty, amplifies the commitment that the speaker makes to the truthfulness of the proposition of the CP!"

次に、齊藤 (2022) のモデルと談話小辞の構造分析を見てみよう。齊藤 (2022) は、Saito (2015) の分析を基盤として、文末要素の統語分布をまとめて、(15) のカートグラフィー分析を提案している。

<sup>7</sup> この仮説は我々の提案で重要になる。なお、VP を補部として選択する  $v^*$  は、外項を取る  $v^*$  (他動詞文や非能格文を形成する) と取らない  $v$  (受動文や非対格文を形成する) があることを示す。しかし、説明を簡潔にするために、2 者を  $v^*$  とまとめて議論を進める。

(15)



#### IV 終助詞の移動分析

本節では、(2b)のような、主格助詞「が」の脱落と、終助詞「よ」の生起と、フォーカスの関係を捉えるために、2つの既存の分析を部分的に援用する。具体的には、注5で触れたように、(6c)の派生段階で既に終助詞が文構造に導入されているという遠藤・前田 (2020)の分析と、Miyagawa (2022: 105)の終助詞「よ」の統語位置の分析である。これらを前提として、次の(16)を提案する。

- (16) 終助詞「よ」は、CommitPに直接導入される場合①と<sup>8</sup>、v(\*)に付加した後に、CommitPへ移動する場合②の2つがある。

①の場合、終助詞「よ」は CommitPに直接付加される。この場合、(13)の構造が派生される。これに対して、②の場合、終助詞「よ」は v(\*)へ付加される。この場合、Cと同じフェイズ主要部である v(\*)の[focus]素性が活性化されて、この素性が Vへ継承される。結果的に、述語動詞に相当する Vに対して、外在化(発音)の際に強調して発音せよという指示が与えられる。その後の派生段階で、「よ」は上位の位置、つまり、CommitPへ移動する<sup>9</sup>。

なお、終助詞「よ」が文末に生じる文には、上昇・非上昇といった2種類の音調(intonation)があ

<sup>8</sup> 齊藤 (2022)の(15)の構造分析を仮定すると、この位置は S(peech-)ActP となる。

<sup>9</sup> 移動の理由としては、論理形式部門で終助詞「よ」は CP(命題)を修飾する、あるいは、これを作用域に持つ、という必要性があるためだと考えられる。

ることが、田中 (2008)や轟木・山下 (2013)によって指摘されている<sup>10</sup>。この音調パターンは(16)に記した2つの派生法に対応していると考えられる。つまり、(形態・音韻部門での) 外在化において①の派生は非上昇音調となり、②の派生は上昇の音調になるのである<sup>11</sup>。

さて、格助詞の脱落の可能性を左右するのは(3)の一般化であるが、本稿では、注3で述べたように、これを形態・音韻部門での外在化条件と捉える。つまり、格助詞が付加する名詞句にフォーカスがあると、格助詞も必ず発音されなければならない、その脱落は許されないのである。この外在化条件を念頭に、関連する事例を考察する。

まず、上述の分析をもとに、(2b)での主格助詞「が」の脱落について検討してみよう<sup>12</sup>。

(17) ブロンドの男の子{が/φ}太郎を殴ったよ

(17)で主格助詞「が」の脱落が生じるとき、発話者は聞き手に「殴った」という出来事が生じたこと、あるいは、「太郎を殴った」という出来事が生じたことを伝えようとしていると解釈するのが最も自然である<sup>13</sup>。前者の解釈では、フォーカスはVにあるが、これは上述の②の派生による効果である<sup>14</sup>。後者の解釈は、フォーカスの領域がVからVPへ広がったことに起因している。この拡張は奥 (2008: 72)が論じるフォーカス投射 (Focus Projection) が関係していると考えられる<sup>15</sup>。

(18) Focus Projection

The focus set of a derivation D includes all and only the constituents that contain the focus source of D.

(18)の定義の the focus source of D は、我々の分析のVに相当する。フォーカス投射がVだけの場合は、(17)は「殴った」という出来事が生じたことを伝えようとする解釈になる。この場合は、(19b)のように主格助詞「が」だけでなく、対格助詞「を」の脱落も可能となる。

(19) a. ブロンドの男の子φ太郎を殴ったよ

<sup>10</sup> 轟木・山下 (2013)は、疑問上昇と平坦に分けている。重要なのは、「よ」の音調パターンが2種類あることで複数の研究が一致している点である。

<sup>11</sup> なぜこのような種類の音調になるかという点を解き明かす必要がある。なお、「ぞ」など他の終助詞についても分析が必要であるが、本稿では「よ」のみを扱う。

<sup>12</sup> (2b)は、「ぞ」を省いて(17)として再掲した。

<sup>13</sup> 説明の都合上、本稿では時制Tの解釈については扱わない。

<sup>14</sup> v(\*)の[focus]素性が活性化して、この素性がVに継承されたためである。

<sup>15</sup> 本稿では、フォーカス投射が拡張することがあると仮定する。例えば、Vのフォーカス投射はVPまで拡張し、Commitのフォーカス投射はCommitPまで拡張し得ると仮定し、単純化したフォーカス投射の分析を想定する。ただし、フォーカス投射については精密化の必要がある。



b. ブロンドの男の子 $\phi$ 太郎 $\phi$ 殴ったよ

また、フォーカス投射が拡張して VP へ広がると、(17)は「太郎を殴った」という出来事が生じたことを伝えようとする解釈になる<sup>16</sup>。結果的に、主語の「ブロンドの男の子が」は TP 指定部にあり、フォーカス投射の外に位置するためフォーカスを受けず、主格助詞「が」の脱落が可能となる。一方、対格助詞「を」はフォーカス投射にあるため脱落しない。この例が(19a)である。

なお、①の派生においては、「よ」が CommitP の主要部を占めるために、これが支配する CP の主要部 C の[focus]素性が活性化されて、この素性が T へ継承される。この場合、フォーカスが TP 指定部の主語に与えられる場合と、フォーカス投射が TP 全体になる可能性が生じる。いずれにしても、主格助詞「が」の脱落は生じず、(20)としての音声的に具現化する。

(20) ブロンドの男の子が太郎を殴ったよ

これらの議論から、格助詞脱落の現象は統語部門での派生の情報をもとにした形態・音韻部門での現象と位置付けられることになる。

## V 多重主語の格助詞の脱落

第IV節での提案をもとにして、(7)から(9)に示した多重主語構文における、主格助詞「が」の脱落を検討してみよう<sup>17</sup>。

- (21) a. 鹿児島と宮崎が焼酎がうまい  
b. 鹿児島と宮崎が焼酎がうまいよ
- (22) a. (?)鹿児島と宮崎が焼酎 $\phi$ うまい  
b. 鹿児島と宮崎が焼酎 $\phi$ うまいよ
- (23) a. \*鹿児島と宮崎 $\phi$ 焼酎がうまい  
b. 鹿児島と宮崎 $\phi$ 焼酎がうまいよ

多重主語構文では、「が」が付く複数の主語が並ぶが、これらの主語は解釈と統語位置に違いがあることが指摘されている。本節では解釈について検討し、次節で構造について検討する。

<sup>16</sup> V が v(\*)へ移動するため、最終的にはフォーカス投射は v(\*)P になると考えられる。

<sup>17</sup> (7)から(9)を(21)から(23)として再掲した。

解釈に関しては、久野 (1973) の中立叙述 (neutral description) と総記 (exhaustive listing) の分析が広く受け入れられている。具体的には、(21a) は (24) のように解釈される。これと関わるのが、(25) に引用した久野 (1973: 32) の記述の一般化である。

- (24) 鹿児島と宮崎が 焼酎が うまい  
           総記                  中立叙述

- (25) 「中立叙述の「ガ」は、述部が動作を表すか、存在を表すか、一時的な状態を表すかの場合に限られる。述部が恒常の状態や習慣的動作を表す場合には、「ガ」は、総記の解釈しか受け得ない。」

(25) の観点から (24) を検討すると、先頭の大主語「鹿児島と宮崎が」と、これに続く「焼酎がうまい」は、主語と述部の関係であると見なすことができる。後者は前者の恒常的状态を表すので、「鹿児島と宮崎が」は必然的に総記解釈を受ける。つまり、多重主語構文の大主語は総記解釈になるのである。

それでは、大主語ではない「焼酎が」はどうだろうか。この主語は、中立叙述と総記の2つの解釈のいずれかを受ける。しかし、結果的には、前者の中立叙述という解釈に落ち着くことになる。それは、久野 (1973: 37) が論じるように、「[総記] の意味にしかとれない『ガ』が文中に現われると、その『ガ』が優先され、他のいかなる構成要素も [総記] の解釈をうけられない」からである。つまり、(24) では、「鹿児島と宮崎が」が総記解釈を受けるために、「焼酎が」は必然的に中立叙述の解釈を受けざるを得ないのである。

ここで、フォーカスの観点から総記解釈と中立叙述の解釈を見直してみよう。中村 (2011) によると、総記解釈は他と区別し際立たせる排他的解釈と見なすことができるので、認識焦点 (identificational focus) と呼ぶこともできる。つまり、総記解釈を受ける語句はフォーカスを受けるが、中立叙述の解釈を受ける語句にはフォーカスを受けないのである。したがって、多重主語構文の先頭の大主語はフォーカスを受ける要素であり、これ以外の主語はフォーカスを受けない要素である。

上述の議論から、主格助詞「が」の脱落には差異が生じると予測される。具体的には、フォーカスを受ける「鹿児島と宮崎が」では、「が」の脱落は許されず、フォーカスを受けない「焼酎が」の「が」の脱落は許される、という予測である。(22a) と (23a) が示すように、この予測は正しい。したがって、主格助詞「が」に導かれる複数の主語があっても、主格助詞「が」の脱落が可能なのは、フォーカスを受けない中立叙述の主語である。

## VI フォーカス解釈と節構造

前節の議論から、関係する語句のフォーカス解釈が決まらなると、格助詞の脱落の可能性も決まら

ないことになる。つまり、フォーカス解釈のための下準備は統語部門で行われて、その情報に応じて、形態・音韻部門で格助詞が脱落され、また、論理形式部門でフォーカス解釈が読み取られる。そこで、本節では、(21a)の2つの「が」主語の構造的な違いについて検討する。本節の後半で明らかになるように、終助詞「よ」が文末についた事例(21b)(22b)(23b)においても、節構造が説明の要となる。

まず、一見すると(21a)は(26)の構造を持つと思われるかも知れない。(26)は、2つの「が」主語はTPの指定部に位置しているという構造である<sup>18</sup>。

(26) [TP 鹿児島と宮崎が [TP 焼酎が [v(\*P) うまい]]]

しかしながら、独立した研究分析から、(27)のように、「焼酎が」は v(\*P) 内に位置している可能性もあることが指摘されている。

(27) [TP 鹿児島と宮崎が [v(\*P) 焼酎が うまい]]

例えば、熊本方言(29)では、共通語(28)と同じく大主語の「鹿児島と宮崎が」には主格助詞「が」が付くが、2番目の「焼酎が」には、(29b)のように属格助詞「の」を用いる方が自然である<sup>19</sup>。

(28) 共通語

鹿児島と宮崎が 焼酎が うまいよ

(Cf. \*鹿児島と宮崎が 焼酎の うまいよ)

(29) 熊本方言

a. 鹿児島と宮崎が 焼酎が うまかばい

(鹿児島と宮崎が 焼酎が うまいよ)

b. 鹿児島と宮崎が 焼酎の うまかばい

(28)と(29)での格付与に関する議論は別稿に委ねるが、共通語の「焼酎が」が熊本方言では「焼酎の」となるのは、共通語・熊本方言の違いにかかわらず、「焼酎が・の」はTP指定部ではなく、それより下位の v(\*P) 内に位置しているためであると西岡 (2013, 2022)は論じている。

さて、(24)で示したように、大主語「鹿児島と宮崎が」は総記解釈を受けるが、この解釈は、述部の「焼酎がうまい」が恒常的状态を表すというだけでなく、構造上の理由もあると考えられる。具体的には、(12)に示したように、C から T への[focus]素性の継承があるために、大主語「鹿児島と宮崎が」

<sup>18</sup> 例えば、Saito (2016)は、多重主語構文の構造として(26)に対応する構造を示している。

<sup>19</sup> (29)の例は、加藤 (2005: 31)の考察を参考に作成した。

はフォーカス解釈を受けて、結果的には総記解釈となる<sup>20</sup>。その結果、(23a)が示すように、大主語の「が」は脱落不可能となる<sup>21</sup>。

(30) \*鹿児島と宮崎φ焼酎がうまい

そうなると、v(\*)P内に位置する「焼酎が」は構造上フォーカスを受けない環境にあり、(24)で示したように、必然的に中立叙述の解釈となる<sup>22</sup>。その結果、第V節の(22a)に関する議論で説明したように、「焼酎が」の「が」の脱落は可能となる<sup>23</sup>。

(31) (?)鹿児島と宮崎が焼酎φうまい

それでは、終助詞「よ」で終わる事例(22b)と(23b)はどのように説明されるだろうか<sup>24</sup>。

(32) 鹿児島と宮崎が焼酎φうまいよ

(33) 鹿児島と宮崎φ焼酎がうまいよ

第IV節で論じたように、この2つの構文には、(16)で言及した②の派生が重要な役割を担う。具体的には、(32)(= (22b))において、v(\*)に「よ」が付加することによって、[focus]素性が活性化して、これがVへ継承される。その結果、述部「うまい」がフォーカスを受けて、強調されて発音されることになる。相対的に、主語「焼酎が」はフォーカスを受けることがなく、これに付く主格助詞「が」の脱落が可能になる。既に、v(\*)P内部で[focus]素性の活性化とVへの継承が生じたため、CPレベルでの[focus]素性の活性化が抑制されることになる<sup>25</sup>。そのため、大主語「鹿児島と宮崎が」は構造上フォーカスを受けることがない。つまり、述部「うまい」が強調される場合には、(34)のように、「焼酎が」だけでなく、大主語の主格助詞「が」の脱落も可能になる。

(34) 鹿児島と宮崎φ焼酎φうまいよ

<sup>20</sup> 西岡 (2013, 2022)の議論も参照のこと。なお、より正確には、大主語の[focus]素性が未与値だったのが、Tによって与値されて値が決まると分析される。また、フォーカスと格助詞の脱落に関する条件については、(3)を参照されたい。

<sup>21</sup> (23a)は(30)として再掲した。

<sup>22</sup> 次に検討する(32)(= (22b))でも「焼酎が」の「が」の脱落は可能だが、(31)(= (22a))ではv(\*)の[focus]素性が活性化していない点で2つの事例は異なる。

<sup>23</sup> (22a)は(31)として再掲した。

<sup>24</sup> (22b)と(23b)をそれぞれ(32)と(33)として再掲した。

<sup>25</sup> この仮説によって、通常「節は1つのフォーカスしかもてない」という事実を捉えることが可能になる。

さて、フォーカス投射はVからVP全体（あるいは、v(\*)P全体）に拡張することもあり得る。この場合、「焼酎が」がその領域に入る。その具体例が(33)(= (23b))である。「焼酎が」の主格助詞「が」は脱落せず発音されるが、大主語「鹿児島と宮崎が」はフォーカスを受けないので、主格助詞「が」の脱落は可能になる<sup>26</sup>。

## VII おわりに

本節では、本稿の論旨をまとめて、課題について触れる。まず、フォーカスに関する仕組みとして、統語部門ではフォーカスを構成素に与える下準備を行い、論理形式部門ではそれを読み取ってフォーカス解釈を行い、形態・音韻部門ではそれを発音として外在化（具現化）するという役割分担があるという全体像を本稿では想定した。

この想定のもとで、終助詞・フォーカス・格助詞脱落という三つ巴の関係を、遠藤・前田 (2020)、Miyagawa (2010, 2017, 2022)、西岡 (2013, 2022)の分析を援用しながら、次の仮説によって捉えられると提案した。

- (35) a. フォーカスを受ける要素は音声的に具現化しなければならず、この場合、格助詞の脱落はできない。
- b. 終助詞「よ」には2つの付加位置がある。
- c. フォーカス投射は主要部から最大投射へと拡張する。

帰結として、格助詞脱落は、形態・音韻部門が関係する現象であるという可能性が浮かび上がることとなった。また、援用した分析、特に Miyagawa (2010, 2017, 2022)と西岡 (2013, 2022)を支持することになる。

しかしながら、課題も残っている。第一に、遠藤・前田 (2020: 87, 92-93)が指摘した、(10)のような感嘆符や疑問符と主格助詞「が」の脱落の関連については、本稿で扱わなかった。また、終助詞には「よ」以外の要素（例えば、「ぞ」）もあるため、どのような分析が可能か探る必要がある。また、本稿で検討した事例における格付与（与値）の分析も論じる必要がある。これらは、今後の課題としたい<sup>27</sup>。

<sup>26</sup> この結果、主格助詞を欠く「鹿児島と宮崎」は総記解釈を受けることはない。したがって、森竹希望氏(私信)が指摘するように、(33)(= (9b))は話題の「は」が脱落している事例として分析できる可能性も得られる。

<sup>27</sup> 注1で触れた我々の口頭発表では、(10)のような表現についても手短かに扱った。

## 参考文献

- 遠藤喜雄・前田雅子 (2020) 『カートグラフィー』 開拓社, 東京.
- Fukuda, Minoru (1993) “Head Government and Case Marker Drop in Japanese,” *Linguistic Inquiry* 24, 168-172.
- 加藤幸子 (2005) 「熊本方言における『が』と『の』の使い分けに関して」『言語化学論集』9, 25-36. <  
<http://hdl.handle.net/10097/48291>>
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店, 東京.
- Masunaga, Kiyoko (1988) “Case Deletion and Discourse Context,” *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, ed. by William Poser, 145-156, CSLI, Stanford, CA.
- 三原健一 (1994) 『日本語の統語構造』 松柏社, 東京.
- Miyagawa, Shigeru (2010) *Why Agree? Why Move?: Unifying Agreement-Based and Discourse-Configurational Languages*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Miyagawa, Shigeru (2017) *Agreement Beyond Phi*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Miyagawa, Shigeru (2022) *Syntax in the Treetops*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 中村浩一郎 (2011) 「トピックと焦点—『は』と『かき混ぜ要素』の構造と意味構造—」『70年代生成文法再認識』207-230, 開拓社, 東京.
- 西岡宣明 (2013) 「熊本方言からみる日本語の主語の統語位置」『言語学からの眺望 2013』福岡言語学会編, 176-188, 九州大学出版会, 福岡.
- 西岡宣明 (2022) 「日本語の v\*P 主語とラベリング」『ことばの様相—現在と未来をつなぐ—』66-81, 開拓社, 東京.
- 奥 聡 (2008) 「言語能力と一般認知能力との相互関係：生成文法の試み」『北海道英語英文学』53, 41-77. <  
<http://hdl.handle.net/2115/34696>>
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Rizzi, Luigi (1993) “Some Notes on Linguistic Theory and Language Development: The Case of Root Infinitives,” *Language Acquisition* 3 (4), 371-393.
- Saito, Mamoru (2015) “Cartography and Selection: Case Studies in Japanese,” *Beyond Functional Sequence*, ed. by Ur Shlonsky, 255-274, Oxford University Press, New York.
- Saito, Mamoru (2016) “(A) Case for Labeling: Labeling in Languages without feature Agreement,” *The Linguistic Review* 33 (Special Issue on Labeling), 129-175.
- 斉藤 衛 (2022) 「3. モーダルと談話小辞のカートグラフィー」理論言語学講座, 2022年8月開催, 東京言語研究所.
- 田中 彰 (2008) 「終助詞ヨのついた文のイントネーション：上昇／非上昇—談話中の発話意図による分

類と教育への応用」第7回日本語教育国際研究大会 (日本語教育学世界大会 2008).  
<<http://nick1129.web.fc2.com/study.htm>>

轟木靖子・山下直子 (2013) 「終助詞『よ』『ね』の音調について—日本語音声教育の視点から—」『香川大学教育学部研究報告 第I部』第139号, 103-112, 香川大学教育学部. <<http://shark.lib.kagawa-u.ac.jp/kuir/metadata/28323>>

